③チェルノブイリ博物館視察（１０月７日（金））

アンナ・コロレスカ副館長及びガイド等による説明

ここは１９９２年に建てられました博物館ですが、当時は２００点しか展示物がありませんでしたが、今では７０００点以上の展示物を展示しております。

チェルノブイリの汚染地の中あるいはウクライナ全土を回りまして、移住者あるいは処理班の方々のところへ直接行きまして、いろいろな展示物を集めました。

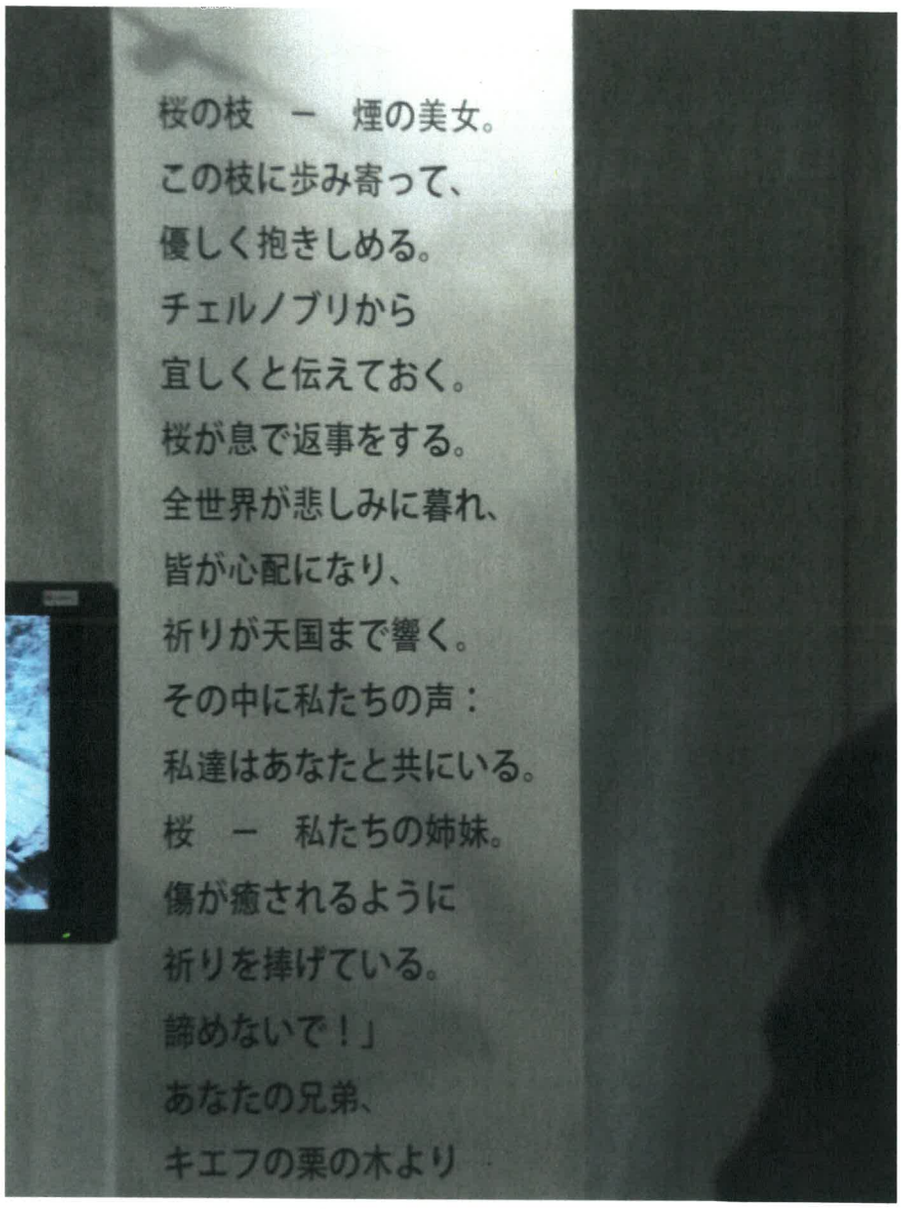
延べ約１００万人の来館者があります。約９０カ国の人々が参りました。特に日本の方々の訪問が多いです。その方々は特に私たちに注目いたします。なぜかといいますと、チェルノブイリと同時に、広島と長崎のことに関しましてもこの博物館で取り上げているからです。

３月の日本の悲劇ということに関しまして、私たちも無関心ではおられませんので、いろいろな日本の方々、学者の方々、マスコミ関係の方々と協力いたしまして、小さなものですが、その関係の展示もしております。





これは、チェルノブイリ市民の女性が書いた詩です。日本の被災者の皆様を支援するための詩でございます。



この布は、チェルノブイリ関係者からの布であります。そのことに関しまして、非常に共感、ホープを感じさせるものであります。

日本の団体のおかげで日本語に訳しまして、こういう展示をしております。

３月の下旬から４月にかけて、日本からのジャーナリストの方々が非常にたくさんいらっしゃいました。このスライドのビデオは、そのジャーナリストの方からの御提供でございます。

ここら辺はたくさんの世界各国からの提供によるものです。どの原子力発電所の事故がいかに作用するかということを考えさせる内容です。

皆様の御協力で、もしかしたら、ここに入っておりますアルバムなど、何か展示物あるいは書類などが展示されることを希望されるようでしたら展示をいたします。



ここは、横路議長が非常に感動されて、ぜひここで一枚写真を撮りたいと言って写真を撮られたところです。

（２階への階段部分）

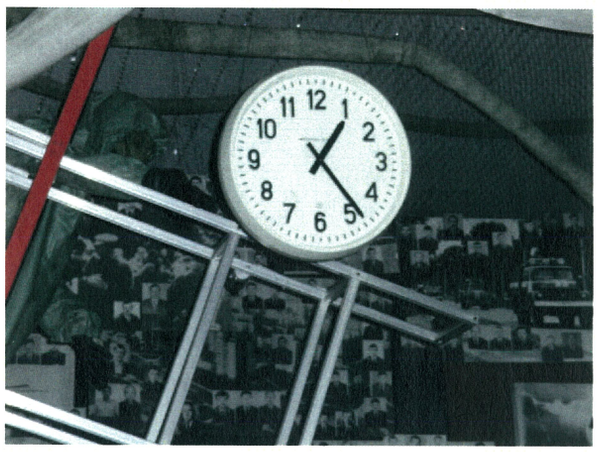
これは、チェルノブイリへ行くための道を象徴しております。これは、町々、村々の標識でございます。これは、ウクライナの７６の村々、町の標識でございます。

事故から一週間の間に、約９万人の人々が自分の家を後にいたしました。また、避難はベラルーシでもありました。そして、約１１万６千の人々が、ベラルーシやウクライナからこの町に来たのです。



８６年当時は、避難に当たりましては、特に必要な身の回りの貴重品だけを持って避難しました。もとへ戻れないということは考えられなかったのです。

この時計は、深夜の１時２３分、８６年４月２６日の事故のあった時間のままストップしております。広島の原爆で、時計が、投下時間で止まっているというのを、私は、以前見たことがございます。二つの国民は、やはり同じようなことを考えているということを感じます。時代は違いますが、やはりこのような気持ちというのは共通しているのだと感じます。



チェルノブイリ原発は、ウクライナにおきます原発の最初のもので、ウクライナのみならず、ヨーロッパにおきます最も規模の大きい原発の施設となる予定でした。

専門家たちは、このチェルノブイリ原発というのは１００％の安全が確保されているというふうに保証しておりました。科学アカデミー会員のアレクサンドロフは、これぐらいに安全性がある原発はモスクワの赤の広場に建設しても大丈夫なんじゃないかと豪語していました。これは人類の傲慢であります。

事故当時、４つの発電の原子炉が機能しておりました。これは４号炉を縦割りにしたものです。ここには１７００本の黒鉛の棒があります。そこには２００本のウランがありました。４０グラムのウランというのは１２００本の石炭に相当するパワーがあります。

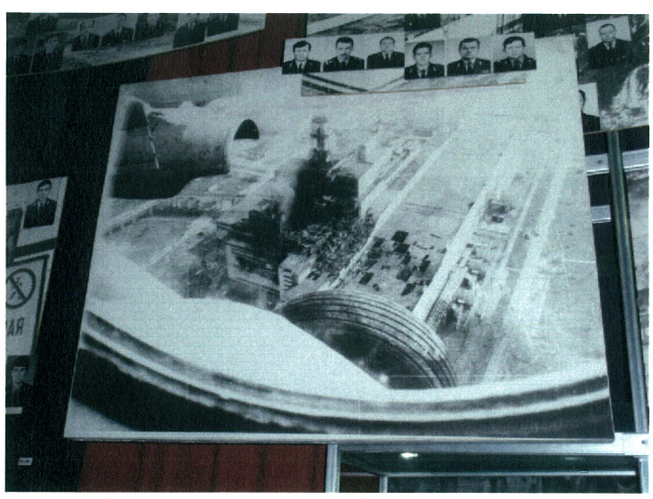
４月２６日の晩に、ここで、悲劇が起こりました。この深夜に一つの実験が行われました。タービンのところで、その回転速度を変えるというものです。しかしながら、その結果、核反応が人間がコントロールできない状態になりました。炉の下部におきまして圧力が高まり、二つの爆発が起こりました。残念ながら、それによりまして、燃料源の保護が爆破されました。３０００トンの上部の保護のところですけれども、それが吹き飛びました。それにより、上部の建屋が破壊され、放射線核種が大気中に放出されるということになりました。３億キュリーの物質が放出されました。その夜には、約１７６名の要員がここで働いておりました。

あるジャーナリストの質問で、チェルノブイリの当時の原発職員と福島の原発職員のどちらが勇気があったのか、どっちが頑張ったのか、という質問がありました。そんなバカな質問をすることがあるでしょうか。あちらでもこちらでも、その人々は自分の職務を遂行したわけです。

原発事故により多くの放射線を浴びましたが、亡くなった職員は致死量によるものでした。この放射能のマーク、黄色に赤い三つの丸ですけれども、これがある人々はもうお亡くなりになった方々です。２８名が一週間の間に亡くなりました。そのうちの２２人は発電所の職員です。



この写真は、２６日の未明、１時ごろに事故があった後の朝、２６日の朝に撮った写真でございます。



上空２０００メートルにおきましても放射能が観測されております。

放出された高熱の燃料等がまき散らされまして、各所で火災が起きるという状態になりました。

原子炉におきます消火活動のほかにも、ほかのところから派遣された消防士が周辺部の延焼を防いでいました。キエフ州の消防署でも緊急出動がありました。最初の段階では２つの小さな緊急出動でした。最初の夜ですけれども、このような若い消防署の職員です。２２、２３歳の若い消防士たちが、発電所の消防署にいた人たちで、この人たちはすぐに、一週間以内に亡くなりました。

チラチン隊長ですが、彼は背骨にあります骨髄移植を行ったおかげで、この事故後

も１８年間生き残ることができました。それにより、二人の息子さんが成長するまで生き残ることができました。５６歳で、腫瘍で亡くなりました。

これは、個人的に撮られた大変珍しいプリピャチ市の情景です。３キロのところにありますプリピャチ、きのう行かれたそうですが、そこの朝の状態です。

このように、事故があったときですけれども、朝は、まだ、このような状態です。

これは避難のためのバスが集まっている写真です。

これは、プリピャチの地方ラジオの声です。放射線が、好ましくないレベルに達しているので、人々、子供を含めて一時避難をいたします、という内容です。２７日の２時から５時までの間に５万人の市民が自分たちの家を後にしました。

この町は、ウクライナにおきまして一番若い町と言われておりました。平均年齢が２６歳、そこには１万７千人の子供がおりました。ここにいた人たちは、自分たちが最先端の発電施設、第一番目の発電施設に働いている誇りと将来の希望を持ってそこに住んでおりました。

２６日、２７日というのは、土曜日、日曜日でございまして、休みの日でございました。この中央部では、たくさんの人がまだ外へ出ております。

何か音が聞こえる程度、大丈夫、大丈夫というふうにだれかが言っています。結婚式もありました。

早朝にはこのような装甲車が出動しまして、何かしら起こっているなというふうには見えているわけです。

２９日になりますと、風の方向がウクライナ共和国の首都であるキエフの方へ向かいました。直線距離でキエフから発電所まで１１０キロございます。８６年の５月１日のメーデーの式典はこういうような状態でした。何ら情報はありませんでした。しかし、うわさというのは広がります。何か発生している、何かあったよというううわさです。



ここにあります秘密の書類ですけれども、何年か後、年月を経て、オープンになったものです。ここにはキエフの、今１１００から３０００マイクロレントゲンである

ということです。普通のヨーロッパの都市は２０マイクロレントゲンが普通でございます。

これは、２９日の２つの新聞です。ウクライナの新聞、そして下はニューヨーク・タイムズでございます。３ページ目をごらんください。そこには、赤く私たちがマーキングをいたしましたけれども、本当に４つの文章だけしか書いておりません。ソビエトの内閣からのものです。チェルノブイリ原発で一つの炉に事故がありまして、国家委員会が設立されまして、被災者を救助している、という内容です。この下には、キエフで世界の自転車競技大会がありますというような写真が作為的に張られております。大丈夫ですよということです。





世界じゅうにおきましてもチェルノブイリ原発の事故のことが知られるようになりましたが、ソビエト国民にはそれが知らされていませんでした。何もわからない状態というのは、非常に悪いわけです。知っているよりも悪いわけです。世界の中で、このような規模の事故の処理という経験はありませんでした。前例のない最初のことでした。

２７日には、キエフにあります軍のヘリコプターのパイロットが物を上空から運ぶようになりました。それにより、手でヘリコプターに積まれ砂、それからカーボンなどを上空から炉心部へ落とすということができました。その１０日間に、５０００トンのとりあえずの砂、鉛、あるいはカーボンなどが投下されました。ここでは、まさに原子力戦争が行われたわけです。

８６年からリクビダートルという処理班の作業員という言葉が私たちの間で有名になりました。それは約６０万人の人々です。そこにはソ連邦を構成する７０の民族がすべて動員されました。ソビエトを構成した国家から参加した人たち、その人たちへの尊敬のために、その国々の旗も残しております。

そちらは、看病に当たった人の白衣です。

この写真をごらんください。

これは生物的ロボットというふうに呼ばれております。ロボットが使えないようなところへロボットとして投入された人たちです。３０００人に及ぶ人たちが、８６年、

そのような活動をしました。その作業を行った時間は、もしかしたら５分だったかもしれませんし、２５秒だったかもしれません。



８６年の状況をまた見てみましょう。

３号炉の屋根の上で活動している人たちの様子です。この技師がこの処理活動のチーフを務めました。現在もキエフに住んでおります。チェルノブイリで障害者になった一人です。

現在、１０万人の人々が障害者となっております。そのうちの１０００人以上は、チェルノブイリの事故後に生まれた子供たちです。

これは最も危険な仕事であるというふうにアナウンサーがコメントしています。

皆笑っています。一分間の作業ということでしたが、それが一体その後の人生にどう影響を及ぼすのかというのは真剣にわかっていなかったのかもしれません。

彼らは、前に鉛の入ったエプロンをしております。２５キロ以上の重さです。これによりましても、それほど多くの放射線量を遮断することは不可能です。

この屋根の上というのは、一時間当たり２００～２０００レントゲンです。１レントゲンというのは１００分の１シーベルトです。

上の方を見て頂きたいのですが、黒鉛があちこちにばらまかれております。ありとあらゆる原発の燃料が吐き出されたものです。



（**○糸川議員**：これでどれぐらい被曝したのですか。）

被爆の値は、個人個人によって違いますが、それぞれに管理され、カードに記入されます。しかし、本当の数値より、かなり低い値が記入されていたのです。その書類は必ず低い値で書かなければならなかったのです。もっとたくさんの人を投入しなければいけない事情があったからです。

ですので、その人たちにとっての社会保障というのは非常に現在問題になっております。彼らは重い病気になっているのですが、書類としてそれが残っていないので、その人たちが本当に高い放射線量であるかという証明ができなくて、社会保障が受けられないのです。

一部の人たちは、イスラエルやアメリカで、自分が受けたであろう線量を再構成して証明してもらおうということを、血液の検査とか、それから歯に残っているような放射線、そういうものから再生して、どれくらい被爆したのかというのを証明しようとしました。しかしながら、そういうような医学的な証明書は、外国のものは国内では法的に通用しないということです。

医療援助というのは受けるわけですけれども、それに対する後の社会保障というのが受けられないでいるというのが現状です。

一つ言えることは、死んでいない人の中で多いのは、やはり腫瘍の病気です。ほとんどの人が腫瘍の病気。死因として心臓の病気で亡くなる方という人もいるわけですけれども、ほかに異常がある場合もあります。白血病とか甲状腺とか。

（**○糸川議員**：先ほど、約６０万人の人が作業に従事し、約１０万人の方が障害者という話がありましたが、それはどこの人の数字なのでしょうか。）

障害者の数はウクライナだけの数字です。処理班の作業員が全ソ連で約６０万人おり、ウクライナは簡単に言えば半分の約３０万人。そのうちの障害者が１０万人ということです。チェルノブイリはウクライナ共和国にありましたので。ただ、多くの人々はやはりウクライナから離れていきました。

（**○河井議員**：２００５年国連報告で、甲状腺がん６０００人、そのうち死亡したのは１５人と言っておりますが、この報告の内容というのは妥当だと思いますか。）

この数字というのは、一般国民だけではなく専門家、医師の間にも非常な不満を呼び起こしました。現在、国際フォーラムなんかでも、この数字というのは一体だれが出したものなんだと常に問題になっています。

ウクライナだけではなく、ソ連全体で２６０人が急性の放射線障害を受けたというふうな報告をされています。そのうちの２００人というのはキエフに住んでいる人たちです。６０人ぐらいがモスクワへ行って、そこに残りました。これは１シーベルト以上、つまり１００レントゲン以上受けた急性の放射線の障害によるものです。

８月の段階で日本の原発事故関係の作業をされた人は６０００人以上というふうに聞きましたが、例えばその中でたった６人だけが２５０ミリシーベルトの被爆を受けたということを聞いております。

我々のところでは２５０ミリシーベルトレベルというのは、何千人という人たちが受けております。そのような人たちが膨大な数に上りまして、そういった人たちはそれほど死亡率は高くなかったのですが、近年それが急激に死んでいっている。そのために、高い放射線を浴びた人が、この２０年間生きて、この後で、その結果があらわれているということだと思います。

その後、彼らは子供をつくりましたが、その子供たちも医療的に取り残されていました。その生まれた子供のうち、ウクライナで１０００人の子供たちが障害者の登録を受けています。それはいろいろな病気で、心臓血管の障害がまず第一、それから胃腸系、循環器系です。ここでいう障害者というのは労働ができないという意味です。

子供のことについて言われる問題としては、もう一つ、骨あるいは筋肉の障害というものがあります。医学的な問題の取り上げた資料（→後掲資料『チェルノブイリの長い影』（　ページ））をお渡しします。長年にわたって子供の健康に対して注目されているお医者さんが書かれた報告ですので、よくごらんください。

ちょっとこちらをごらんください。

これはチェルノブイリ発電所の事故前の様子を表したものです。これはチェルノブイリの第一の原子力発電所です。

７０年代、８０年代に１号炉、２号炉が建設されました。８１年、８３年に３号炉、４号炉の運転が行われました。５号炉、６号炉は、建設中の状態です。８６年の秋には、５号炉は電気の生産をする予定でした。先ほども言いましたように、１７６人の職員が働いておりました。５号炉の建設現場には３００人の建設労働者が働いておりました。



８６年４月２６日午前１時２３分４８秒のことです。

８６年に数々の委員会がこの原因解明について研究をしました。８６年の６月には、ＩＡＥＡによりまして、レガソフが発表となりました。これには、機械の不良という可能性は低く、運転要員の不備によるものだろう、人的要因であろうという発表でした。つまり、８６年には、人的要因と位置づけ、運転要員の責任というふうに言われておりました。

現在は、チェルノブイリ発電所の施設、構造が原因である、ということは、みんなが承知しております。

８６年、６月から１１月に、石棺が建設になりました。半年間の間に延べ９万人の人々が携わり、コンクリートなどを遠隔操縦して、このような覆いをつくりました。

内部におきまして、数々のセンサー類を設置することにも成功しました。その中におきましては、例えばメタンであるとか、色々と監視することに貢献いたしました。

この石棺は、３０年、４０年は大丈夫であろうという話でありましたが、残念ながら、現在では、放射線の観点からいって非常に危険な建物となっております。

次のホールへ行きましょう。

これは、３０キロ圏内の一部でございます。

８６年当時は約２０万平方キロメートルに及ぶ広大な土地でしたが、今に至りますまでに、避難を含めまして、立入禁止令地域は２倍に拡大しております。ルクセンブルクという国がありますが、その国の面積とほぼ同じです。



こちらは、ポレーシアと名づけられました、古くから森と沼や川で有名なところです。文化の蓄積された地域でございます。何世紀にもわたりまして、人々がここで文化をはぐくみ、住んでおりました。１１９０年に、チェルノブイリのことが歴史書にも描かれており、この地域では、ウクライナ人だけではなく、ロシア人、ベラルーシ人、バルト三国の人々、ユダヤ人等、いろいろな人々が住んでおりました。

こちらの老人たちは村々へ帰ってきた人たちです。サマショール、と言いまして、自分たちで帰った人たちということですけれども、この汚染地の中に約３００人の人たちが住んでいます。

この処理活動に当たった人たちというのは、約３０万人が軍人で、それ以外の人たちというのは、一般の市民、職業軍人ではない市民でありました。それは約４０に及びます各国家機関、省庁の人々です。その中には通信関係の人もいますし、医療関係者もいます。ありとあらゆる職業の人がいます。

その人たちは、このガーゼでつくったマスクを、一つだけ身に着けて、この発電所の下に坑道を掘るために動員されました。流出した燃料が下へどんどん行って、下の地下水にまで辿り着いて爆発を起こすのではないかという危険性がありました。この水素爆発、新たなる爆発を防ぐために、それを食いとめなければなりません。軍ある

いは消防士たちがポンプで、地下水をくみ出すということをしました。地下７メートルのところに、このようなトンネルを作り、そこへコンクリートを流し込むということです。炉の下の部分に穴を掘り、その下に行くまでのトンネルを掘り、セメントで防ぐということをしました。三交代で２０人の人たちが２４時間勤務をしました。

これはアナンさんが言っておりますけれども、人間ができる最大限以上のことをこの人々はやっていると。ここでは英雄的行為とは言わなくて、人々の気持ちから出た行動でした。この作業を行うために、原子炉に近づこうとするがために、数々の大切な命が失われたということです。これにより、約１４０メートル進みまして、原子炉の下まで行くことができました。

こちらにありますヨーロッパの地図は、事故後、正確に汚染が広がっているというものです。

非常に被害を受けましたのは、ウクライナ、ベラルーシ、そしてロシアです。さらに、スカンジナビア半島、あるいはアルプス山脈の方にも被害が広がりました。ヨーロッパにおきましては、ポルトガル、スペイン、マルタ、この３カ国だけが被害を免れました。



これにより、世界じゅうの地球に住む人々は、その脅威を感じることとなり、、世界じゅうの人々の関心が呼び起こされました。

アメリカでは、レーガン大統領に対しまして、脊髄のドナーを提供しようという提案がなされました。アメリカのマッケンジーさんという方が活動を行いました。こちらは、それに関係する３４の子供病院です。





日本も、まず最初に、このチェルノブイリに関しまして援助を差し伸べてくれた国でした。東京にありますチェルノブイリ子ども基金、笹川財団、それから、中部、名古屋にありますチェルノブイリ救援基金などです。

こちらは、日本の２つの原爆に関する展示です。
これは、広島に原爆が落とされる前の展示です。
１９３８年にドイツの学者が原爆の基本理論になることを行いました。その７年後には、その基本理論から実際の使用が行われました。

原発の事故というのは、約１０万年に１回の確率でしか起きないというようなことが言われたことがあります。しかし、この５７年の間に４回ほど事故がありました。イギリス、アメリカ、ウクライナ、福島です。

こちらにありますのは、１９４５年のときの広島の様子です。広島のサダコさんの話は旧ソ連でも有名でした。

ここには赤と黒の写真があります。
向こうは、８６年の事故に対して、死亡した人たちを悼む写真です。黒い写真です。
しかしながら、それだけではなく、年月は進んでいるところであり、８６年に自分の命をささげた人たちにも、子供が育ち、孫が生まれ、それが育っていくということで、赤い写真をを掲げています。あちらには、自分のお父さんの写真と一緒に子供が二人おりますけれども、結婚して孫もいますよという写真です。



あちらの一番上には、ヘリコプターで接近して映画を撮ったカメラマンがおり、その後亡くなりましたが、その息子さんの結婚式の写真が飾ってあります。

私たちは、来ていただいたような来館者の人たちに、よく毎回、日本政府の支援によります展示物について説明いたします。新しい石棺の像というものの主たるドナーであるということも説明します。

一般の日本市民の方々が、一般のウクライナ人との間の交流を持ちたいということもよく聞きます。彼らは、ウクライナと日本の人たちが協力して、被害に遭った人たちを助けるために来てくださっています。

それは、単なるチェルノブイリの健康回復だけにとどまらず、文化的な交流まで広がっております。チェルノブイリ近辺中部の団体でございますけれども、お医者さんが来て子供たちの診察をしてくださっております。

３月に日本で地震がありましたが、ウクライナでチェルノブイリの市民団体の人々から電話が寄せられました。その人たちは、すぐに、何か、毛布であるとか、お金を集めましたよということを言ってきました。彼ら自身は被災者であったりしますのでお給料もなく、お金もない、そういう人たちが集めたお金というものがありました。自分たちの生活の困窮の中でも、日本の悲劇に対して無関心ではいられなかったのです。

皆さんは、これから、お昼御飯のときに、ゼムリャキという団体、それはプリピャチからの避難者の団体ですが、その皆さんと会合があるというふうに聞いております。それはその一つであります。

こちらのパソコンでは、世界各国からの援助の状態というのがわかるようになっています。展示者が自分で検索するようになっております。



次のホールへ参りましょう。

ここは現代の人々の魂のホールで、世界に対する、あるいは家庭に対する考え方について考えさせるためにつくったホールです。地球におけます人間というものは生命体の一つであります。

ここにあります模型ですが、発電所の上部の部分をほぼそのまま再現したものです。




これは、世界の原子力発電所を意識してつくったものです。

あちらは、右と左に、二つのエンゼル、鳥のようなエンゼルを想定したものが上にあります。左は、善意に巻かれたというものをあらわした白い鳥のイメージです。その隣、黒いエンゼル状のものが頭の部分。この体の部分に使ってあります刺しゅうの手ぬぐいは、汚染地から届いたものです。右側にあります鳥は、復興、それから悲劇をあらわしております。生と死、喜びと悲しみという二つのものが人間の中にあるというものをあらわしています。その二つの鳥が、この中央部にあります原子炉を囲んでおります。

ここには、私たちの歴史であります古い宗教画などが置かれております。これで、古いウクライナのコレスチア地域の文明、文化というものが打ち捨てられたというイメージをつくっております。




これは、キエフにある、多くの子供が亡くなった学校から頂いたおもちゃです。ごらんください。子供たちの顔写真がございます。彼らの将来というのは明るい未来でなければならないということを紹介しています。

こちらでは、当時のプリピャチの映像です。

これは、夏に、汚染された地域で山火事があった映像です。事故があった当時、このような火事というのは非常に危険なことでした。

プリピャチの町にいつ帰れるのか、という質問を受けることがありますが、こちらの建物は、もう老朽化しており、そこに、新たな資金を投入して、新しい町をつくる

ことは困難です。しかしながら、こういった土地に住んでいた人たちにとっては、非常に重要なところであり、生活の一部を思い出そうとして帰ってくる人もいます。若い頃の自分を探しに戻って来て、チェルノブイリという言葉が恐ろしいイメージを持っていなかった時代を懐かしむ人もいます。



こちらの写真の子供たちというのは、８６年に、避難した地区の子供たちです。

いま、この子供たちがどうなっているのか正確には把握できませんが、みんなが同じように大きくなって健康でいてくれれば、と私は願っております。

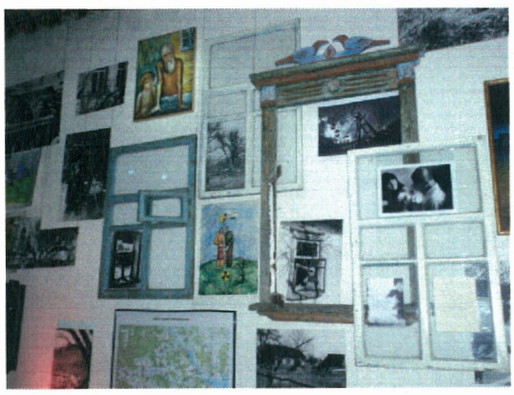
チェルノブイリの被曝者という認定を受けた人は、ウクライナだけで３５０万人います。

こちらは、放射能が、いろいろ方向を変えて世界じゅうに広まっている様子を示したもので、ヨーロッパに広まっている様子、これでヨーロッパ全土が被害を受けたということがはっきりと分かります。ベラルーシやウクライナ、ロシアが非常に影響を受け、スカンジナビア、アルプス山脈の周辺の地域、ポルトガルとスペインとマルタ以外のヨーロッパはすべて放射能の影響を受けました。



５月１日には、スペインのマドリード、アメリカ、日本を含む各国から空気中に異常な放射線が放出されているという報告が国連になされました。

これは、汚染地から持ってまいった窓でございます。



これは、現地に戻って住んでいる人たちの様子です。

これは、チェルノブイリ地域で唯一の破壊を免れた教会です。

チェルノブイリの汚染地に戻る人たちというのは高齢の方々です。ジャーナリストが、どうして戻ってきたのかと聞いたところ、老人は、うちのばあさんが、戻らなかったら私はあなたに悪いことをするよと言うので戻ってきた、と答えました。ここでは生活ができる、魚もとれるし、野菜もとれるし、牛だっているから何とでも生きていける、一番悪いのは子供たちと一緒に住めないことだが、あとは何とか生きていけると老人たちは言っています。

８５歳、８３歳、７９歳、このような高齢の方々は、自分たちの生活の基盤のあったところからほかへ移れなかった人たちです。８７年の町へ、これまで戻った人たちは約１０００人ほどおりましたが、現在では３００人まで減っております。老人ですのでお亡くなりになっているということです。

学者が言っておりますのは、非常にパラドックスなことですけれども、老人の中の死亡率は戻った人たちの方が低いということです。避難した人たちよりも戻った人たちの方が死亡率は低い。それは、自分の生まれ故郷がその老人たちの気持ちを支えているのではないか、との説明です。

こちらは、エリーナ・コステンコと申しますウクライナの有名な詩人の言葉で、このゾーンというところでは、だれかにとっては戦場であって、だれかにとっては何かの罪の場所であった、といった趣旨の内容です。



（**○糸川議員**：さきほどの被害者の認定の基準をちょっと教えてください。）

これは、国の定めた基準で、８７年当時からあったものです。健康に問題がある人たちで、処理班の人、避難民の人たち、現地に住んでいる人たちに分かれます。避難民の人たちは、今は圏内には住んでおらず、キエフに避難した人たちもいます。処理班に当たった人たちは、もう退役してどこかに住んでいる人たちもいます。最後のカテゴリーである現地に住んでいる人たちというのは、３０キロ圏内だけではなくて、各地にある汚染地に住んでいる人たちです。この人たちに加えて、その人たちから生まれた人たち、今日において汚染地で生まれた人たちも含みます。チェルノブイリの人たちから生まれた子供たちというカテゴリーになりますが、１８歳までに何がしかの障害がなければそのカテゴリーから外れるということになります。

（**○糸川議員**：今後の我が国での対応について、アドバイスがあれば、お願いします。）

まず、情報を制限したりしてはいけません。汚染のレベルに関しては、政府に入った情報、専門家に入った情報というのは、そのとおり、人々に発表しなければいけません。その際は、単に数字を垂れ流すだけではなくて、どうしなければいけないか、人々が適切な時期にいかに行動するかということを言わなければなりません。

チェルノブイリ事故のときは、残念ながら、ＫＧＢがおりました時代ですので、いろいろな問題がありました。そもそも、ソビエトにおきましては、原発といいますのは軍産共同体の一部でございましたので、そういう事情もあり、情報公開は望めないものでした。

７０年代に、原発がどんどんつくられた最初の頃の原発、チェルノブイリ原発もそうですが、ロシアの原発は、何年も経過して、本来であれば更新しなければいけないものを何とかどんどん更新を引き延ばししていたという話もあります。

皆さんの発電所というのは海の近くですが、海産物というのは日本人のためだけではなく、世界じゅうのものです。私たちもエビも海草も好きです。内陸の国でヨード不足ですので、海産物というのは大変大切です。甲状腺の保護のためにも海産物が必要なのです。私たちのところで、ヨードの防護という考えはありませんでした。日本で、ヨードの防護があったのかどうかは知りませんけれども、これは必要なことだと思います。どうか、子供の健康を守ってください。子供たちの将来は、私たちの地球が続くかどうかの問題です。私たちの世代が犯した過ちを行わせないように、子供たちの将来の安全を考えなければならない、と思います。

（**○小平団長**：ウクライナで、政治家の人たちは、政府の政策としては今後も原発は必要であるという立場ですか。一般の人は、原発に対してどういう思いを持っているでしょうか。）

一般市民は、代替エネルギーを見つけなければならないと感じていると思います。第四世代の原子力発電所というのは安全性が高いと言われていますが、それを管理するのは人間です。それは全くのオートマチックではありません。皆さんのところであったような自然の力の前でどうなるでしょうか。津波の高さというのは想定よりも高かったわけでしょう。福島の事故で良かったことは、福島の原発には格納容器というものがあって、チェルノブイリのような大破壊が起きなかったことです。しかし、日

本は地震国です。まだ、事故処理も完全には終わっていない状況ですが、今後もそういう可能性があるということであり、私たちも心配をしております。

どうもお聞きいただきまして、ありがとうございました。

最小限の損失で処理が行われることを心から願っております。

また、皆様方のお子様方の健康を祈ります。



